

オートポイエシス論は文学テキストの夢を見るか？ — ドイツ文学システム論争を超えて —¹

名執 基樹

1. はじめに

昔々、ポストモダン、ポスト構造主義という言葉が流行っていた頃、システム論は構造を説く古い理論と見なされていた。しかし、この状況はやがて変化する。動きの中心はドイツ。そして、1980年代のドイツには、文学研究でもシステム論を検討する動きがすでにあった。82年、経験的文学研究の理論的支柱 S. J. シュミットの監修で、マトゥラーナのオートポイエシス論のドイツ語版が出版される。² オートポイエシス論的転回後のルーマンの『社会システム論』³が出るのが84年。翌85年にはそのルーマンに依拠した文学史記述をプルンペが提案する。⁴ 90年には、旧来のシステム論の誤解を解くミュラーの論文が文学論の概説書に掲載され、⁵ オートポイエシス論の文学への応用を説くシュヴァーニッツの入門書も出る。⁶ 80年代末からの数年間は、文学システム論の名著が出揃う時期である。ミュンヒェンの文芸社会史派の『文芸社会史の理論基盤』(88年)、シュミットの『18世紀における社会システム〈文学〉の自己組織化』(89年)、ヴェルバー『システムとしての文学』(92年)、デ・ベルク/プランゲル編『コミュニケーションと差異』(93年)、プルンペ『近代文学のエポック区分』とプルンペ/ヴェルバー編『文学の観察』(共に95年)、デ・ベルク『コンテクストと偶有性』(95年)。⁷ ここに至り、システム論を静的構造論と

¹ 本研究は科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究(20652027)の助成を受けたものである。

² Maturana, H. R.: *Erkennen: Die Organisation und Verkörperung von Wirklichkeit*. Braunschweig (Vieweg) 1982.

³ Luhmann, N.: *Soziale Systeme. Grundriß einer allgemeinen Theorie*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1987.

⁴ Plumpe, G.: *Systemtheorie und Literaturgeschichte*, in: Gumbrecht, H.-U. u. U. Link-Heer (Hg.): *Epochenschwelle und Epochenstrukturen im Diskurs der Literatur- und Sprachgeschichte*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1985, S. 251-264.

⁵ Müller, H.: *Systemtheorie und Literaturwissenschaft*, in: Bogdal, K.-M. (Hg.): *Neue Literaturtheorien*. Opladen (Westdeutscher Vlg.) 1990, S. 218-234.

⁶ Schwanitz, D.: *Systemtheorie und Literatur*. Opladen (Westdeutscher Vlg.) 1990.

⁷ Heydebrandt, R. u. a.: *Zur theoretischen Grundlegung einer Sozialgeschichte der Literatur. Ein struktural-funktionaler Entwurf*. Tübingen (Niemeyer) 1988, Schmidt, S. J.: *Die Selbstorganisation des Sozialsystems Literatur im 18. Jahrhundert*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1989, Werber, N.: *Literatur als System*. Opladen (Westdeutscher Vlg.) 1992, de Berg, H. u. M. Prangel (Hg.): *Kommunikation und Differenz. Systemtheoretische Ansätze in der Literatur- und Kunstwissenschaft*. Opladen (Westdeutscher Vlg.) 1993, Plumpe, G.: *Epochen moderner Literatur. Ein systemtheoretischer Entwurf*. Opladen

捉える認識は過去のものとなり、システム論は、自己組織性や自己参照性がキーワードとなる、動的な運動体の理論として、文学研究でも認知されるようになった。

しかし、90年代前半、文学システム論の主要書が出揃おうとする正にその時、研究グループ間では、すでに激しい論争が起こっていた。91年、シュミットらの本拠地ゾーゲン近郊のフロイデンベルクで文学システム論の代表者を集めた学術会議が開かれる。少し遅れて登場したプランゲルらのグループも、同年にはゾーゲンを訪れ、シュミットたちと激しい対立を引き起こす。90年代、文学システム論は久々のドイツ原産の文学理論として一定の地位を獲得するが、一見成功と見えるその裏で、実はその代表者の間で問題点が指摘されあっていたのである。

さて、20年近くも前の論争を今取り上げるのには理由がある。先ず第一に、ドイツ以外の、特に日本の様子を見ると、マトゥラーナやルーマンのオートポイエシス論は、ちょうどこの20年間で一定の広がりを見せている所であり、2010年にはドイツの文学システム論の展開についての紹介論文も著されている。⁸ したがって、このタイミングで、日本であまり知られていないこの論争を整理しておくことは、当時ゾーゲンで直接論争に触れることができた者として果たすべき義務のように思えたからである。第二に、この間、システム論には見逃せない変化も起こっている。複雑論的転回（J. アーリ）が言われるほどに、現代のグローバルで流動的な社会はよりプロセスのダイナミックな流れに沿ったシステム像を求めようになっており、それに応じるように、複雑理論、マルチエージェントモデルなど、柔軟で、具体的調査課題と結びついたアプローチも現れている。⁹ 抽象的な境界画定問題が争点の一つであった、ベルリンの壁崩壊直後の時代とは隔世の感がある。新たな観点から当時の議論を振り返り、打開の方向性を探る時期が来ていると言える。

予め述べておくと、この論争には勝者敗者の区別はない。論争は、背景となる文学テクストとオートポイエシス論という二つの深層で開始間もなく行き詰る。構図は単純だが、根は深い。先ずは、主役となる文学システム論の構想の紹介から、始めてみたい。

(Westdeutscher Vlg.) 1995, Plumpe G. u. Niels Werber (Hg.), *Beobachtungen der Literatur. Aspekte einer polykontexturalen Literaturwissenschaft*. Opladen (Westdeutscher Vlg.) 1995, de Berg, H.: *Kontext und Kontingenz*. Opladen (Westdeutscher Vlg.) 1995.

⁸大井奈美：「ネオ・サイバネティクスと文学研究」、『思想』 No.1035 (2010), 131-147 頁。

⁹ Urry, J.: *The Complexity Turn*, in: *Theory, Culture & Society*. Vol. 22(5) (2005), 1-14. 社会学内のシステム論受容の全体像は, Castellani, B. and F. Hafferty: *Sociology and Complexity Science*. Berlin (Springer) 2009, Sawyer, R. K.: *Social Emergence*. Cambridge (Cambridge Univ. Press) 2005 を参照。

基盤理論	観点	拠点	研究者	テーゼ・アプローチ
経験的文学理論 (S. J. シュミット)	行為者(意識システム)と文学行為システム	ズィーゲン大学	S. J. シュミット/G. ルツシュ/A. バルシュ/P. ヘイル/L. クラマシュキー, 他	文学活動の経験的調査, ラディカル構成主義
社会システム論 (N. ルーマン)	コミュニケーションのオートポイエシス(自己創出)	ボーフム大学	G. プルンペ/N. ヴェルバー, 他	多元コンテキスト論, 準批判論, 機能システム娯楽
		ライデン大学	M. ブランゲル/H. デ・ベルク, 他	差異論, テキスト/コンテキスト差異
		ほか	D. シュヴァーニッツなど	
社会システム論 (T. パーソンズ)	構造機能分析 (AGILモデル)	ミュンヘン大学	J. シューネルト/G. イェーガー/M. -C. オルト, 他	文芸社会史の組織化方略としての構造機能分析

表1 論争に登場する文学システム論構想

2. 文学システム論の三つの着想

論争の陣営は大別して三つ、経験的文学理論を出発点とするズィーゲン大の経験的文学研究派、ルーマンに影響を受けたボーフム大やオランダ・ライデン大などの研究者たち、そして、パーソンズの構造機能主義に基づくミュンヘン大の文芸社会史派である(表1参照)。¹⁰ このうち、システム論への取り組みは経験的文学研究派が最も早く、シュミットの『経験的文学研究の概要』(80年)¹¹にはすでに文学システムという言葉が登場する。経験的文学研究とは、文学現象を経験科学的に社会学的・心理学的手法で調査する学際的な研究動向で(国際学会 IGEL, 国際誌 Poetics), 創成期にその理論基盤となったのが、この『概要』である。言語ゲーム論に代表される後期ヴィトゲンシュタインの哲学から出発したシュミットは、70年代のテキスト論の時代に、テキストの意味は記号的に固着されたものではなく、行為者の言語行為の枠内で決まるという立場を打ち出す。¹² つまり、行為了解上の枠組みが、テキストの意味処理に方向性をもたらす(言語実用論的テキスト観),

¹⁰ 文学システム論の動向は、以下を参照。Jäger, G: Systemtheorie und Literatur Teil I. Der Systembegriff der Empirischen Literaturwissenschaft, in: *IASL (=Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur)*. Bd. 19 (1)(1994) S. 95-125, Ort, C.-M.: Systemtheorie und Literatur. Teil II. Der literarische Text in der Systemtheorie, in: *IASL*. Bd. 20 (1) (1995) S. 161-178, de Berg, H.: *Sinn und Unsinn einer systemtheoretischen Literatur- und Kommunikationswissenschaft (Hallischer Medienarbeiten 7)*. Halle (HALMA) 1997, Jahraus, O. u. Schmidt, B. M.; Systemtheorie und Literatur. Teil III. Modelle Systemtheoretischer Literaturwissenschaft in den 1990ern, in: *IASL*, Bd. 23 (1) (1998) S. 66-111, de Berg, H.: Kunst kommt von Kunst. Die Luhmann-Rezeption in der Literatur- und Kunstwissenschaft, in: de Berg, H. u. Schmidt, J (Hg.): *Rezeption und Reflexion*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2000, S. 175-221, Reinfandt, Ch.: Systemtheorie und Literatur Teil IV. Systemtheoretische Überlegungen zur kulturwissenschaftlichen Neuorientierung der Literaturwissenschaft, *IASL* Bd. 26 (1) (2001) S. 88-118. 日本語の文献としては、大井(2010)が詳しい。

¹¹ Schmidt, S. J.: *Grundriß der Empirischen Literaturwissenschaft*. Braunschweig (Vieweg) 1980. 1991年にゾーアカンプ(Suhrkamp)社版ペーパーバックも出版されている。

¹² Schmidt, S.J.: *Texttheorie*. München (Fink) 1973.

そして、行為者の認知活動によってテキストの意味関連が具体的に構築されると捉えたのである（認知論的テキスト観）。以降、認知科学的傾向を強めるテキスト研究との繋がりを深めつつ、行為という枠内での意識の運動性の中に感情面も含めた意味現象の実相を求め立場を貫いてゆく（ここに、生きる仕組みとしての認識システム論を展開するマトゥラーナとの接点がある）。ここから『概要』はこう展開する。まず、シュミットは、美学的に高い流動性を持つ芸術活動の実態を踏まえ、（1）文学においても内容ではなく實用論的側面が、すなわち、活動面の暗黙の了解が意味処理の枠組みを成す、と捉える（曰く、消火器も芸術活動の文脈で提示されれば鑑賞対象となり、係員が設置場所を改めるや否や、日用品となる）（暗黙の慣習〈Konvention〉による期待調整）。したがって、（2）いったん、文学と了解されると、それが日記や書簡でも、鑑賞モードに切り替わり、主観投入的かつ美学的評価優先的に認知処理されることになる（文学慣習の期待特性としての多価値性と美学性）。このため、（3）認知科学的観点からだけでなく、文学論としても、言語素材としてのテキストと、認知内の具体的意味構成物とを分ける必要が出てくる（認知構成物としての意味）。（4）全体としての文学活動は、テキストを文学として（＝慣習による期待調整下で）扱いあうことで生じる、テキストの創作、受容、加工（批評、翻訳）、媒介（出版、上演）の諸行為の連鎖のことであり、この連鎖が運動体としての文学システムを生む（慣習下でのシステム関連）。（5）テキストの意味はそれを認知構成する行為者を前提としてこそ事実性の言明が可能な調査対象となり、文学は文学システムとして捉えてこそ動態が解明可能なものとなる（対象像の転換：テキストから文学システムへ）。この構想は、その後、二つの次元でシステム論的に深められてゆく。一つは、行為者をシステムと捉えた時の認識システムの次元である。80年代、シュミットはマトゥラーナのシステム論的認識論の流れを汲むラディカル構成主義の主唱者になる。¹³ これは、私たちが意味体験している世界は、私たち生的システムが生きる仕組みとして認知的にシステム内に生起させたものだとする立場であり、意味や情報は認識システム外には存在しないとする。この立場から、コミュニケーションとは記号伝達ではなく認知活動の行為上の連鎖のことであり、テキスト自身は意味を持たないと、『概要』の言語観はシステム論的に裏づけされてゆくこ

¹³ 例えば、Schmidt, S. J.: Der Radikale Konstruktivismus, in: Schmidt, S. J. (Hg.): *Der Diskurs des Radikalen Konstruktivismus*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1987, Schmidt, S. J.: Radikaler Konstruktivismus. Forschungsperspektiven Für die 90er Jahre, in: Schmidt, S. J. (Hg.): *Kognition und Gesellschaft*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1992, S. 7-23. シュミットのこの分野の代表作は、Schmidt, S. J.: *Kognitive Autonomie und soziale Orientierung*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1994.

とになる。もう一つは、社会システムの次元である。¹⁴ 慣習概念は、通底するルーマンのシステムコード論を受け入れることで、文学活動相互の連結を可能にし、他の活動との弁別を図るシステムの境界面定要因として（慣習＝コード）、システム論的内実が与えられることになる。しかし、ルーマンの場合、行為ではなくコミュニケーションによってシステムが築かれると捉えるのに対し、シュミットは同僚のヘイルの共参照（Synreferenz）概念を援用し、あくまで行為が行為者の認知領域を介して連鎖し（慣習の共参照）、システムが形成されると捉える。ここで予め指摘しておく、ルーマンのコミュニケーション概念は独自のもので、ルーマンはコミュニケーションを、他我を超えた地平で成立する社会的出来事、社会性そのものの編成母体とでも言える、個人に分解不能な社会の基本構成素と位置づけている。こうしてルーマンは、社会についての普遍理論を打ち立てる観点から、コミュニケーションによる社会性の動態にシステム論の照準を合わせる理論戦略を選ぶのだが、経験的文学研究のパラダイムの設計者であるシュミットは、行為や行為者という具体視可能な、心理学的、社会学的調査に開かれた理論構築を優先させたのである。

二つ目の陣営はそのルーマンの理論¹⁵を出発点とする。ルーマンの社会システム論のもととなるマトゥラーナのオートポイエシス（自己創出 autopoiesis）論とは、もともとは、生命現象を対象に、その生化学的な相互作用の連鎖が織り成す円環的ネットワークを一つのサイバネティックシステムと捉え、そこから生命現象を、自らの相互作用を通じて相互作用体としての自分自身を自律的に生成・維持し続ける現象として理論化したものである。この理論の鍵は、環境と地続きの生物の相互作用から（オーブンプロセス）、相互作用の連鎖が織り成す作動面の自己関連性に視点を移した所にある（作動的閉鎖性）。ルーマンの理論は、この生命現象における相互作用を社会現象におけるコミュニケーションに置き換える形で構想されており、そこからルーマンは、コミュニケーションは現実内の諸事象（物理的世界、個人の意識、他の社会的背景）により具現化されるものでありながらも、コミュニケーションどうしは意味的レベルで繋がりを築き、作動的関連体として、様々な社会システムを形作ると捉えてゆく。こうして、パーソンズのシステム理論から引き継いだ、複雑な現実の中での社会システムの把握という機能主義の説明課題とマトゥラーナの作動

¹⁴ シュミットの論争前の文学システム論については、Schmidt 1989 を参照。

¹⁵ ルーマンについては、以下を参照。Luhmann 1984, Luhmann, N.: *Die Wirtschaft der Gesellschaft*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1988, Luhmann, N.: *Die Wissenschaft der Gesellschaft*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1990, Luhmann, N.: *Die Kunst der Gesellschaft*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1995, Luhmann, N.: *Die Gesellschaft der Gesellschaft I/II*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1998.

面への視点転換が会うことになる。この観点から、経済、芸術、科学のような、全体社会を貫いて存在するいわゆる機能システムについても、次のように理論化される。(1) 生命現象において、相互作用が生命・非生命を含んだ複合的な出来事でありながら、その連鎖が生命活動の関連体を成すのと同様に、機能システムでも、構成要素となるコミュニケーションは意味資源をシステム（自己準拠）と環境（外部準拠）双方から得つつ（例：絵における表現と題材）、それが芸術なら芸術としてのシステムコードの下で展開されることで、互いに連鎖しあい、活動体としてのまとまりを持つシステムを築いてゆく。(2) この場合のコードとは、経済における損益、芸術における美醜、科学における真偽のような、抽象度の高い機能システム特有の優先価値のことで、言わば高度に脱具体化され共有化された社会性のことである。コードはその遍在性ゆえに、環境内の様々な動因や資源を捉えてコミュニケーションを発動させる触媒としての意味も持つ。(3) システムにとって環境は社会現象として自らを具現化されるための不可欠な存在であり、この意味でルーマンは自らの構想を正確にはシステム／環境論だと強調する。ただし、その際、(4) 環境を定義するのはシステムであり、システムが自らの意味論を通じて環境に意味付与し（システムによる観察）（例：同じ書籍でも、鑑賞対象として見るか商品と捉えるかで、文学と経済で、扱うシステムが入れ替わる点に注目）、それをシステムは自らの具現化に生かす。(5) システムの構成要素は、個人を超えた基本的な社会現象単位としてのコミュニケーションであり（曰く、「人間はコミュニケーションを行えない。コミュニケーションが行えるのはコミュニケーションだけだ」¹⁶）、それに対し、行為者（意識システム）は社会システムにとっての環境に属する。こうしたルーマンの理論は、二つの側面から文学研究に受け入れられていく。一つは文学の社会理論としての側面で、その最前線に立っていたのがボーフム大のグループである。プルンペはいち早く 80 年代半ばにルーマンの社会システム論を応用し、文学テキスト内の自己準拠／外部準拠の意味資源の求め方の違いに審美主義とリアリズムの両極を対応させる文学史論を提案した。¹⁷ 90 年代、この構想は、文学現象を様々なシステムの観察問題として分析する、多元コンテクスト的文学研究（polykontexturale Literaturwissenschaft）のアプローチへと展開する。¹⁸ 『近代文学のエポック区分』（1995）では、ルーマンの作品メディア論¹⁹をもとに、全体社会に対する文学テキストの準拠状態

¹⁶ Luhmann 1990, S. 31.

¹⁷ Plumpe 1985, S. 251-264.

¹⁸ Plumpe u. Werber (Hg.) 1995.

¹⁹ ルーマンはフォルム（形式）／メディア（媒質）の対概念で作品を捉える。その際、フォル

(システムが環境の何を文学的に使用可能と認めてきたか)をエポック構造として探り(文学システムによる社会の観察),²⁰ 『近代の美学コミュニケーション (1/2)』(93年)では、逆に、学問システムの側から芸術システムがどう主題化されてきたかが分析される(学問システムによる芸術の観察)。²¹ 彼らのアプローチはマクロな文学現象の記述手段としてルーマンの社会システム論を捉えるもので、機能システムについての逆提案も含め(コード:面白い/退屈, 機能システム: 娯楽),²² ルーマンの社会理論に文学研究の側から呼応したものと言える。もう一つの傾向は、ポスト構造主義的な差異論の延長線上にルーマンの脱主体化されたコミュニケーション論を位置づけるもので、この傾向を最も鮮明に打ち出したのが、システム論的読解論を展開したオランダ・ライデン大のグループである。彼らは、文学テキストを、テキスト成立時のコミュニケーションの連鎖の中に置き直すことによって、テキストに可能性の地平の中で選択された差異としての意味、テキスト/コンテキスト差異(Text/Kontext-Differenz)を読み解こうとする。²³ クエンティン・スキナーの意味/コンテキスト論²⁴とも結びつけながら、具体的作業としては、コンテキストとなるテキスト群との差異からテキストの位置値を割り出すことを彼らは提案する。これにより、ポスト構造主義的記号観をシステム論的に組み換え、差異の戯れを超えた社会的に基礎づけられた解釈理論が確立できると彼らは主張したのである。

三つ目の文芸社会史派の立場は、これまでのものとは幾分性格を異にする。このグループは経験的文学研究派との研究交流も深く、ルーマン理論もよく理解している。にも関わ

ムがそこから構成されることになる、社会的に通念化された、表現選択の母体としての意味の地平が、メディア(媒質)である。言語に譬えるなら、語彙がメディア、具体的な文がフォルムに当たる。Luhmann N.: *Das Medium der Kunst*, in: *DELFIN*, Heft 7 (1986) S. 6-15, auch in: Luhmann, N.: *Schriften zu Kunst und Literatur*, Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2008, S. 123-138, および, Luhmann 1995, S.165-214 を参照。

²⁰ Plumpe 1995.

²¹ Plumpe G.: *Ästhetische Kommunikation der Moderne*, 2 Bde. Opladen (Westdeutscher Vlg.) 1993.

²² Werber 1992, Plumpe, G. u. N. Werber: *Literatur ist codierbar*, in: Schmidt, S. J. (Hg.): *Literaturwissenschaft und Systemtheorie*. Opladen (Westdeutscher Vlg.) 1993, S. 9-43., Plumpe 1995, Plumpe G u. N. Werber: *Umwelten der Literatur*, in: Plumpe u. Werber (Hg.) 1995, S. 9-34 を参照。

²³ ライデン派については、以下を参照: de Berg, H.: *Text-Kontext-Differenz*, in: *SPIEL (=Siegener Periodicum zur Internationalen Empirischen Literaturwissenschaft)* Jg. 10 (2) (1991) S. 191-206, Prangel, M.: *Zwischen Dekonstruktionismus und Konstruktivismus. Zu einem systemtheoretisch fundierten Ansatz von Textverstehen*, in: de Berg u. Prangel (Hg.) 1993, S. 9-31, de Berg, H.: *Die Ereignishaftigkeit des Textes*, in: de Berg u. Prangel (Hg.) 1993, S. 32-52, de Berg, H. 1995.

²⁴ 言語実用論思想の影響を背景に、スキナーは、思想家の著書を、無名な作家をも含む同時代の対話的コンテキストの中に位置づけ、その関係性からテキストの意味を探るという思想史のアプローチを提案している。Q・スキナー(半澤/加藤訳)『思想史とはなにか 意味とコンテキスト』岩波書房、1990年を参照。

らず、一世代前のパーソンズのシステム論を彼らが選んだのは、出版史、教育史、政治史等、膨大な領域に膨れ上がった文芸社会史の個別研究を社会理論的な枠組に納め直すという、ドイツ学術振興会からの委託課題が彼らの出発点だったからである。実務的課題達成力を重視した結果、彼らはゾーゲンモデルもルーマンモデルもいまだ不十分と判断し、パーソンズの構造機能分析を選ぶ。²⁵ これは、(1) 社会現象は複数の要因の関連体として生起するものと捉え、その諸要因を分析的に四つの機能、すなわち、イ) 適応 (A) (外的インプット)、ロ) 目標達成 (G) (外的アウトプット)、ハ) 統合 (I) (内的インプット)、ニ) (残り得る、行動や価値などの) 潜在パターン (L) (内的アウトプット)、の2×2の四要因からなる正方形マトリックス (AGIL 図式) にまとめて調査するというものである。

(2) これをマクロレベルでの文学現象に当てはめると、外部の適応の A は文学市場や図書館、外部の目標の G は文学助成や検閲、内部の統合の I は学校や家庭などでの文学形成、そして、内部の行動・価値パターンの形成の L に貢献するのが狭義の文学現象で、具体的には、創作活動や読書活動、ならびに、そこで保持されるシンボルシステム (ジャンル・主題性・表現形式等) が、この L に含まれる。こうして得られた AGIL のマトリックスを、事実資料で満たしつつ、(3) 各機能内での代替関係 (例: 貸し本業 vs. 書店) (機能的等価性) や、機能間の相互的影響関係 (例: 文学市場の拡大とジャンルの普及) (相互浸透) を追うことで、諸機能の関連体として文学システムが動的に維持、展開されてゆく様子が分析されることになる (構造機能分析)。しかも、(4) AGIL のマトリックスは、全体社会にも、よりミクロな文学運動や文学行為にも当てはめることができる。入れ子的、階層的に視点を移しながらシステムの動態が追えるのである。しかし、(5) 彼らはこうした図式的モデルが持つ対象記述上の限界も認め、このアプローチをあくまで発見法的 (heuristisch) なものと位置づける。歴史社会学的な立場から、経験的文学研究派同様、彼らも経験科学性への意識は高いが、理論的には、他のシステム論の動向にも関心を払う、開かれた立場を彼らは取る。

3. 対立点のタイムスリップ

さて、文学システム論争で軸となったのは、経験的文学研究派とルーマン派との対立、内容的には、行為システム (経験的文学派) 対テキストシステム (ルーマン派) の対立である。文芸社会史派は発見法的立場を取るため、批判対象となるよりも、主に双方を吟味

²⁵ Heydebrandt u.a. (Hg.) 1988 を参照。

グループ	構想			批判内容			対ルーマン
	オートポイエシス論	テキスト	行為者	対ズイーゲン	対ボーfum	対ライデン	
ズイーゲン大学 (経験的文学研究派)	×	×	○	経験性問題			
ミュンヘン大学 (文芸社会史派)	×	○	○				
ボーfum大学 (ルーマン派)	○	○	×	テキスト問題	コード問題	コード問題	
ライデン大学 (ルーマン派)	○	○	×		差異問題		

表2 研究グループ間の対立関係を、構想内の各観点の位置づけ、相手陣営への批判内容、および、ルーマン理論への批判点/修正点で表したものの。

する立場で議論に関与することになる。全体像を示すとすると、表2のようになる。

一方の極、経験的文学研究派の主張はこうである。²⁶ 文学テキストは認知されて初めて意味を持つ。テキスト論的にも、美学的にも。テキストの意味の同定は、それを受容する認知主体の中においてしかなされ得ず、受容者（層）の受容事実としてのみテキストの意味は経験的調査の対象となる（心理・社会・歴史学的な検証対象）。認知から離れてなお成立する意味単位としてテキストを捉えることは、オントロジー（対象理論）の設定を誤らせ、文学本来の開かれた活動性を視野の外に追い出してしまう。したがって、ルーマンの社会哲学上の選択をそのまま文学現象に引き継ぐことは問題が多い。ルーマンのオートポイエシス論は、個を超えた、コミュニケーションの自己運動に文学現象を単純化し、行為者による観察のかわりに社会システムによる観察が、行為者間の多様な関係展開のかわりにコミュニケーションが説明枠となり、テキストの意味が実体化され、経験科学的な展望が失われることとなる。したがって、「望ましくない哲学的重荷を背負う」よりは、「構成主義的な土台に立って、行為者とその意識を理論に組み込む」道を選ぶべきだ（シュミット）。²⁷ こう、経験的文学研究派は捉えるのである。

もう一方の極、ルーマン派はこれと真逆の立場になる。²⁸ ルーマンは、意識システムと

²⁶ シュミットのルーマン批判は以下を参照。Schmidt 1989, S. 28-64. (= Kapitel 2. Der theoretische Apparat: Systemische Konzepte), Schmidt, S. J.: Kommunikationskonzepte für eine systemorientierte Literaturwissenschaft, in: Schmidt. (Hg.) 1993, S. 241-268, Schmidt. 1994, S. 65-82, Schmidt, S. J.: Konstruktivismus, Systemtheorie und Empirische Literaturwissenschaft, in: de Berg, H. u. M. Prangel (Hg.): *Differenzen. Systemtheorie zwischen Dekonstruktion und Konstruktivismus*. Tübingen (Francke)1995, 213-246, Schmidt, S. J.: 'System' und 'Beobachter': Zwei wichtige Konzepte in der (künftigen) Literaturwissenschaftlichen Forschung, in: Fohrmann, J. u. H. Müller (Hg.): *Systemtheorie und Literatur*. München (Fink) 1996, S. 106-133.

²⁷ Schmidt 1989, S. 38.

²⁸ ボーfum派からの経験的文学研究に対する批判は、Werber. 1992, S.9-28. (=Kapitel 1. Theorien der Gesellschaft als Literatur), Plumpe u. Werber 1995, ライデン派からは、Prangel 1993, de Berg

社会システムはそれぞれ交互にシステムにとっての環境に位置しあう、意味を構造的カップリング上の接点とするだけの、別々の作動的に閉じたシステムだと捉えている（意識は意識と、コミュニケーションはコミュニケーションとしか連鎖しない）。コミュニケーションという社会的出来事はあくまで個人を超えた所で成立するものであり、個人の認知に矮小化してはならない。ルーマンのオートポイエシス論はこの角度からコミュニケーションを観察するものである。だからこそ、オートポイエシス論は、テキストを社会的次元で捉える有効な装置となる。これに対し、テキストの意味は意識の中にしかないと捉える経験的文学研究派は、テキストを研究対象とすることもできず、文芸社会史派のオルトも指摘する「テキスト論的自己封鎖化」²⁹に陥ってしまう。経験的文学研究派のモデルでは、「文学システムを行為者の意図の加算物とみなし、作家や他の行為者の感情世界に引きこもる道しか残さない」（プルンペ／ヴェルバー）。³⁰

つまり、テキストの位置づけの違いがシステム論の構想の違いにそのまま重なり、文学研究のコンセプトに関わる、容易に解くことができない対立が生まれていたのである。

問題を、対象論（オントロジー）と方法論（メソッド）の認識を中心に整理しておこう。誤解されやすい点だが、経験的文学研究派がテキスト中心の理論構築を批判するのは対象論的な理由からで（意味内在的テキスト観を持たない）、テキストの資料的利用自体を否定する訳ではない。³¹ 経験的文学研究派の問題は、むしろ、自ら深く掘り下げた対象論の深淵に対し、無事に渡り切るだけの方法論の道筋を彼ら自身が開拓しきれずにいた点にあったと言える（脱意味化したテキストに対する有意で妥当な処理法という難題）。しかし、他方で、ルーマン派の構想が、その道筋を示すものであったかと言うと、「旧来の問題記述をただシステム理論の概念で上書きするだけとなる危険が大きい」（イエーガー）と、文芸社会史派も、研究手法という点では懐疑的である。³² 経験的文学研究派は、テキスト問題と

1993, de Berg 1995, Prangel, M.: Kontext - aber welche?, in: de Berg u. Prangel (Hg.) 1995, S. 153-170, de Berg, H. u. J. Hoogeveen: Die Andersartigkeit der Vergangenheit. Eine kritische Auseinandersetzung mit der radikal-konstruktivistischen Literaturhistoriographie, in: de Berg, u. Prangel (Hg.) 1995, S. 187-212, de Berg, H. u. M. Prangel: Noch einmal: Systemtheoretisches Textverstehen. Eine Antwort auf Lutz Kramaschkis Kritik am 'Leidner Modell', in: de Berg, H. u. M. Prangel (Hg.): *Systemtheorie und Hermeneutik*. Tübingen (Francke) 1997, S. 117-142, de Berg 1997, de Berg 2000. を参照。

²⁹ Ort, C.-M.: Sozialesystem 'Literatur' - Symbolsystem 'Literatur', in: Schmidt (Hg.) 1993, S. 269-294, 引用は, S. 271。

³⁰ Plumpe u. Werber 1995, S. 17.

³¹ 「“テキストでの” 調査」として、構造面や作用面についての調査の統合が論じられている。Hauptmeier, H. u. S. J. Schmidt: *Einführung in die Empirische Literaturwissenschaft*. Braunschweig (Vieweg) 1985, S. 112-138 を参照。

³² Jäger 1994, S. 98. 他に, Ort, C.-M.: *Literaturwissenschaft als Medienwissenschaft*, in: Faulstich, W.

取り組んでこなかった訳ではない。特に、歴史記述法として、テキスト資料の扱いについては、文芸社会史派との議論交流の中でも問題となっていた。³³ 実際、その交流を通して、テキスト問題に対する一つの方向性も生まれる。社会システムとしての文学とシンボルシステムとしての文学との関係（活動関連 vs. 記号現象）を理論化することで、テキスト問題に展望を与えるというものである。³⁴ 91年のフロイデンベルク会議は正にこの点を議題に掲げたものであった（「文学：社会システム—シンボルシステム」³⁵）。これを機にシュミットは、社会システム／シンボルシステム問題を、行為者相互の平行な認知という観点で整理してゆこうとする。シンボルシステムによって支えられた平行な認知により、コミュニケーション行為の連動が作られ、そこから逆にシンボルシステムへのフィードバックも生まれる。すなわち、認知とシンボルとコミュニケーションとが自己組織的な関係になるという構想である。³⁶ これとともに、シンボル、ディスクール、文化、という個人を超えた概念が、シュミットの理論に現れるようになる。ただし、これは手法論上の検討がないまま、終わる。そして、対立は、テキスト論を全面に打ち出すライデン派の登場により、エスカレートする。ライデン派の差異論的立場からすると、平行な認知というシュミットの発想は差異論とは対極の静的な構造決定論でしかない。コミュニケーションを偶有性の観点（ゆらぎ、不確定性）で動的に捉えるルーマンの理論を退行させるも

(Hg.): *Medien und Kultur*. Göttingen (Vandenhoeck) 1991, S. 51-61, Ort, C.-M.: *Systemtheorie und Hermeneutik?*, in: de Berg u. Prangel (Hg.) 1997, 143-172。オルトの立場は経験的文学研究派に近い：「まず、認知、コミュニケーション、社会システム、制度、メディアの関係性を整合的かつ有意にモデル化すべき、というシュミットのもっともな苦言に応えないまま、短絡的、場当たりのシステム論の諸概念を文学テキストに応用し続けるのなら、理論的な停滞を、目先を変えて覆い隠しただけ、ということになってしまう」（Ort 1997, S.148）。

³³ 85年の経験的文学研究の国際機関誌 *Poetics* の歴史記述法の特集では、ゾーゲンのシュミットやルッシュに加え、文芸社会史派のシェーネルトやオルトも寄稿している（*Poetics*. Vol.14 (3-4)(1985)を参照）。その四年後の89年にシュミットの『18世紀における社会システム〈文学〉の自己組織化』が表されるが、これは、広範な分野の文献から、近代化過程における文学システムの成立を描いたもので、シュミットの80年代の文学システム論の検討結果であると同時に、歴史記述に対する経験的文学研究側からの一つの回答でもあった。ただし、シュミットはここでは個々の文学テキストを記述対象とはしていない。Schmidt 1989を参照。

³⁴ 文芸社会史派側のテキスト問題に関する指摘は、Meyer, F. u. Ort, C.-M.: *Literatursysteme - Literatur als System*, in: *SPIEL* Jg. 9 (1) (1990) S. 1-14, Ort 1993, Jäger 1994, Ort, C.-M.: *Texttheorie - Textempirie - Textanalyse*, in: Barsch u. a. (Hg.): *Empirische Literaturwissenschaft in der Diskussion*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1994, S. 104-122, Ort 1995, Ort 1997を参照。

³⁵ Schmidt (Hg.) 1993はこの会議での発表をもとにした論文集である。

³⁶ 実際には、これにメディアを加え、認知とコミュニケーションを、文化（シンボル）とメディアが仲立ちして、自己組織的な関係を作る、とシュミットは構想を整理する。Schmidt, S. J.: *Medien, Kultur: Medienkultur. Ein konstruktivistisches Gesprächsangebot*, in: Schmidt (Hg.) 1992, S. 425-450, Schmidt 1996を参照。

のだ、と彼らは批判する。³⁷ ともに動態を論じようとしているにも関わらず、対象論上の死角が対立を生んでいるのである（この問題は後で触れる）。しかも、ボーfum派にしろ、ライデン派にしろ、テキスト実体的な立場を取っている認識はない。対象論上、ボーfum派の準拠論もライデン派の差異論も、テキスト単独の意味ではなく、コンテキストの中で展開される社会的出来事としての意味を問題としているからである。しかし、オートポイエシス論という形で、行為者や行為を環境に置き、コミュニケーションを唯一の構成要素として意味を固着させようとする限り、経験的文学研究派や文芸社会史派は、経験科学的根拠に乏しいテキスト実体論に陥っていると、批判せざるを得ない。「社会的諸条件を視野から追い出し、(…)文学テキスト自身を(…)歴史の中で運動する意味現象という名のエージェントに仕立て上ることになる」(シュミット)からである。³⁸

ここで、ルーマン派が個別に展開した論点(コード問題、差異問題)についても紹介しておこう。この議論からは、ルーマン理論を直接テキスト論に結びつける際の問題点も示唆できる。まず、ボーfum派の論点であるが、彼らは、ルーマン自身の芸術システムの把握を見直す所から出発する。彼らは、ルーマンの芸術システムのコード、美/醜は、現代では鑑賞者側も用いない価値原理だとし、より妥当性が高い、面白い/退屈を提案する。そして、このコードにふさわしい、娯楽を機能とした上位の社会システムが存在すると捉え、それを人間の余暇活動に結びつけた社会領域として新たに導入する。そして、この観点から、経験的文学研究派の慣習・コード概念は個人の受容や個人の美学レベルに留まり、機能システムの社会的原理を体現できないと批判し、差異論を基盤とすることでコードのような構造概念は不要となると主張していたライデン派に対しては、それでは、システムとしての機能や、システムとしての関係性が無視され、際限なき差異と言う致命的な問題

³⁷ Prangel 1993, de Berg 1993, de Berg 1995, de Berg 1997, de Berg 2000 を参照。ただし、シュミットは認知構造の共通性を認知の連動条件として重要視するが、これと、そこから誘発されるテキストの意味の動態、「テキスト - 行為者 - コンテキストシンドローム」(Schmidt 1995 S.230)とは別である(コード/脱コード論ではない点に注意)。また、デ・ベルクらは、シュミットの慣習概念を言語の慣習性一般と同等視しているが、シュミットの慣習は、ランデン派のモデルで言うと、むしろ、理論化すべき、テキストが置かれる、暗黙の社会的コンテキストに当たる。シュミットの慣習論の問題は逆に、受容者が個々独自の鑑賞内容を持つことが許されるだけでなく(弱い多価値性)、一人で複数の鑑賞内容を同時に構成することも許容されると仮説した点にある(強い多価値性)。後者の仮説は、事実性が確認されていない。慣習をめぐる議論については、Kramaschki, L: Anmerkungen zur Ästhetik- und Polyvalenzdiskussion der empirischen Theorie der Literatur, in: *SPIEL* Jg. 10 (2), S. 207-233, Barsch, A.: *Ein integrativer Blick auf Literarische Konventionen. LUMIS-Schriften 59*. Siegen (LUMIS) 2000 を参照。

³⁸ Schmidt 1993, S. 263.

も引き起こすと指摘する。³⁹ 実際、ライデン派の差異論は、差異という観点を押し通しながらも差異論以外の何らかのコンテキストモデルをどこかの時点で設定しなければ歯止めが利かなくなるという、実施上の難点を持つ。この点については、他からも指摘が多く、ライデン派自身も課題を認めることになる。⁴⁰しかし、機能やコードといった意味基準を観念的に突き止め、その観点をもとに機能システムを境界区分するボーfum派の提案も、社会学的に見て無理が多い。余暇といった、活動の分散が顕著な領域を一つのシステムとして捉えらるとなると、なおさらである。結局、この点では、彼らも多くの批判を招いている。⁴¹ システム／環境理論として社会の実現形態面を視野に納めるルーマンと比べ、ボーfum派は社会の事象的次元を切り詰め、過度のコミュニケーション論的単純化を行ってしまっていたと言える。一方、ライデン派は差異という自前の論点から、慣習や認知の平行性を論じる経験的文学研究派に対しては、差異の役割を認識できない構造決定論だと批判し、ボーfum派に対しては、コンテキストとの差異が見逃され、システム論の道具立てを借りた単なる社会反映論に留まっていると指摘する。⁴²しかし、ライデン派の差異論は、あくまで個々のテキストに向けられたもので、ボーfum派のエポックという大きな規模での準拠構造の変動と問題を同一に論じることは難しい。経験的文学研究派への批判も、立論上の違いが無視されたものである。ライデン派が言う差異は、意味現象をコミュニケーションの社会面に引き上げた上で捉えたものであり、経験的文学研究派は、それに対し、社会面そのものを個々の意識システムへと解体し、そこから認知の平行性を論じる。経験的文学研究派の視点に置き換えた場合、ライデン派の言う差異とは、複数の行為者間でパレルに認知された、差異体験の共有性という問題に該当するに過ぎない。しかも、通常、

³⁹ Werber 1992, Plumpe u. Werber 1995 を参照。シュミットの文学慣習は、適応される美学内容は異なり得るとされ、システムコードも、文学的／非文学的という、具体的価値定義に欠けるものが提案されている。ブルンペらは、こうした点を社会的内実欠けると、批判する。

⁴⁰ Kramaschki, L.: *Das einmalige Aufleuchten der Literatur. Zu einigen Problemen in 'Leidener Modell' systemtheoretischen Textverstehens*, in: de Berg u. Prangel (Hg.) 1995, S. 275-302, Ort 1997, 特に S. 156-159, 論争の外部からの指摘では, Jahraus u. Schmidt 1998, 特に S. 68-70, S. 83-86, Sill, O.: *Literatur in der funktional differenzierten Gesellschaft*. Opladen (Westdeutscher Vlg.) 2001, 特に S. 78-83. を参照。ライデン派自身の課題認識については, de Berg 1994, de Berg 2000 を参照。

⁴¹シュミットらは、全ての社会システムが二値的な単純化されたコードで作動していると捉える方が幻想だと捉える: Schmidt 1993, 特に S. 260, Schmidt 1995, 特に S. 234-236, Kramaschki, L. 1991, 特に S. 226-228. 後にデ・ベルクも同様に指摘: de Berg, H. 2000, 特に S. 207-210. 文芸社会史派のオルトは単純な分類論は社会構造の認識を阻むと指摘している: Ort 1991, 特に S.55-56, Ort 1993, 特に S. 286-287. 論争外部のズイルは、むしろ、単純なコード定義ができない所に文学の特殊性を見るべきだ、と指摘している: Sill 2001, 特に S. 88-94.

⁴² 経験的文学研究派への批判は脚注 34, ボーfum派へは, de Berg 1997, 特に S. 13-17 を参照。

共有性の程度は個人ごとの社会化過程により多様だが、ライデン派では、差異体験は単独のテキストに一般化され、偶有性の次元が一つ欠落する。ルーマンで複数のコミュニケーションであり得たものが、テキスト一つの意味現象に置き換えられてしまう。シュミットも指摘している点であるが、そもそも、ルーマンはこのような意味同定的なテキスト観を持たない。⁴³ ルーマンを脱構造論的な差異理論の延長線上に位置づけるライデン派は、テキスト解釈論であろうとするために、記号論に近い切り口の差異論となってしまうと言える。一般的にこう指摘できる。ルーマンの社会理論は、言わばコミュニケーションというゲームを成立（社会面）の観点から見るもので、プレイ（テキスト）の観点で見るとではない。したがって、テキスト論に接続する場合には、一つの方法論として整理し直し、より広い対象論の枠内で十分にその射程を見極めておく必要がある。この点で、ボーフム派のようにルーマンの構想をそのままマクロな成立構造の分析に引き継ぐ場合には摩擦は起こりにくいだが、それでも説明原理をテキスト論的なものに取り違えてしまうと、システム／環境論としてのルーマンの社会学的構想をも見誤ることになる。

しかし、90年代の文学システム論争の難しさは、この論争が、初めからシステム論以前の、文学研究のコンセプトとしてのテキスト観（ルーマン派）、脱テキスト観（経験的文学研究派）に結びついていた点にある。経験的文学研究派にしてみれば、彼らが進めてきた「テキストから文学システムへ」の脱テキストの視点転換が、事もあろうにルーマンによって、システム論側から巻き戻されたかのように映る。逆に、ルーマン派にとっては、これまで経験的文学研究派がリードしてきた文学システム論は「テキストのレベルに取り組むことを、全面的に怠ってきた」（ヴェルバー）⁴⁴ように見える。対立の基底にあるのは、文学研究のパラダイム上の認識の違いである。「対案的伝統」⁴⁵を自認する経験的文学研究派は、「文学研究の関心が、ルーマンに習って、意味論のみに縮減されてしまうなら、システム理論的文学研究は必然的に新しい衣を着ただけのテキスト解釈学になってしまう」（シ

⁴³ Schmidt 1995, S. 231 には、ルーマンの次の引用がある。「テキスト自体は、作動的な、活性化した機能する記憶ではない。テキストとは単なる人工物であり、記憶の保存という試練にさらされた可能性にしか過ぎない」（Luhmann. 1990, S. 159）。実際、これは、シュミットの考えに近い。ルーマンは、他我間関係上の社会現象としてコミュニケーションを見ており、テキストを中心にっていない。テキスト（文書）については、他我関係を遠隔化し、偶有性が増大する点を論じる。これに対し、デ・ベルクは、ルーマンと逆にテキストにコンテキスト構造が内在化していると論じたり（de Berg 1993, S. 41-42）、テキストがマクロ社会学的考察の犠牲になっていると捉えたり（de Berg 1997, S. 7, 脚注 19）、テキスト論化に苦慮している。

⁴⁴ Werber 1992, S.103.

⁴⁵ Viehoff, R. (Hg.): *Alternative Traditionen: Dokumente zur Entwicklung einer Empirischen Literaturwissenschaft*. Braunschweig (Vieweg) 1991.

ュミット)⁴⁶と、ルーマンのシステム論の経験性の欠如に批判を向ける。ルーマン派は、「構成主義は、学問的原則を強調し、文学テキストの学問的解釈を全面的に弾劾するが、そもそもシュミットは、構成主義の前段階の1979年にすでに、エンツェンスベルガーの言葉を借りて、“解釈という醜い悪徳を倒せ！正しい解釈などという特に醜い悪徳を倒せ”と宣戦布告しているのだ」(プランゲル)⁴⁷と、対案であろうとする経験的文学研究派の行き過ぎたテキスト解釈批判に問題を見る。対立点はそれぞれのルーツに向かいタイムスリップし、コード、差異といった各論以前の深い対立に、早い段階から行き着いてしまう。フロイデンベルク会議後は、デ・ベルク/プランゲル編の『コミュニケーションと差異』(93年)、同『差異：脱構築主義と構成主義の間で』(95年)、同『システム理論と解釈学』(97年)と、⁴⁸ライデン派が、経験的文学研究派を交え、議論の流れを保っていたが、ズイーゲンの若手クラマシュキーがライデン派に対し、意味の学問的確定は解釈者に文学をゆだねるエリート主義に陥ると直接批判を向けると、⁴⁹学問的観察は専門家にこそできるものだとデ・ベルク/プランゲルが反論するなど、⁵⁰基本的観点の差は埋めようがない。論争は、90年代の半ばに平行線のまま終わる。ただし、経験的文学研究派の、安易なテキスト論化への批判、開かれた活動の中の文学といった論点が、ルーマン派の課題意識に全く届かなかった訳ではない。97年、デ・ベルクは、こう総括している：「経験的文学研究の主要仮説がどんなに問題を孕んだものであったとしても、彼らは徹底した社会科学的な装備を身につけていることで、単純にシステム理論だけを用いたテキスト研究がぶつかる暗礁を避けてゆける。対象領域のこの種の徹底的社会科学化に、他のシステム理論的文学研究派のトレンドはいまだに苦しめられている」。⁵¹しかし、一方の経験的文学研究派は、その時すでに、ある種の自省段階にいた。その発端は対外的な論争が始まるフロイデンベルク会議以前にまで遡る。この文学システム論争には、実は、もう一段深い深層がある。他グループを批判したのと全く同じ経験性問題の観点で、自分たちのシステム論をめぐる論争

⁴⁶ Schmidt 1993, S. 263.

⁴⁷ Prangel 1993, S.13.

⁴⁸ de Berg u. Prangel (Hg.) 1993, de Berg. u. Prangel (Hg.) 1995, de Berg u. Prangel (Hg.) 1997.

⁴⁹ Kramaschki 1995, S. 299.

⁵⁰ de Berg u. Prangel 1997, S. 138.

⁵¹ de Berg 1977, S. 6-7. なお、デ・ベルクは、予期構造の部分的否定、全体的否定を区別するE. マンのシーンレベルでの分析に差異論的アプローチの打開の可能性を見ようとしている：de Berg 1977, 特に S.11-13, de Berg 2000, 特に S. 194-196, 及び, Mann, E: ‚Dadaistische Gartenzwerge‘ versus ‚Staatsdichter‘, in: de Berg u. Prangel (Hg.) 1993, S. 159-182, Mann, E: ‚Das Verstehen des Unverständlichen, in: de Berg u. Prangel (Hg.) 1997, S. 263-287 を参照。

が、経験的文学研究派の内部で早い段階から起こっていたからである。⁵²

4. 似ているが全く違う、とブルデューは言った。

経験的文学研究はゾーゲンのグループだけではない。ハイデルベルクの心理学者グレーベンのグループはテキストに関してはより寛容な立場を取る。80年代、グレーベンは、対象論ではなく方法論で経験的文学研究を基礎づけようとした。しかし、それだけでは不十分である。内在論的な作品の価値証明を課題とする限り、読書心理学であれテキスト言語学であれ、挫折を運命づけられる。錬金術的認識課題からの対象像の転換を行うこと。文学を等身大の文学（文学活動）として、経験的文学研究の対象としようというのが、ニコル（NIKOL, 非因習的文学研究：Nicht-Konventionelle Literaturwissenschaft）を名のつたシュミットらの方向性であった。この観点が国際的な経験的文学研究の流れの形成に貢献したことは、すでに述べた。つまり、ゾーゲン派は対象論で経験的文学研究を牽引してきたのである。しかし、学問領域として成熟すると、経験的文学研究は調査主導的なものとなる。理論は相対化され、理論には、単なる社会論や文学論を超えた、社会調査への具体的展開力が求められるようになる。これに関して、無視できないエピソードがある。文学システム論争が始まる前の89年、経験的文学研究の国際会議で、すでに経験的文学研究に広範な影響力を与えていたブルデューと、経験的文学研究を代表する理論家で、『18世紀における社会システム〈文学〉の自己組織化』をまとめたばかりのシュミットとの討論が企画された。創作、出版、受容、批評等と、異なる行為の連鎖によるプロセスとして文学現象を捉えるシステム論と、作者一点に視点を構え、批評や出版等の多様な関わりを象徴資本（名声）や経済資本の概念でむしろ作者の属性として捉え、そこから作者間のポジションの違いを場（champ）として捉えるブルデューの理論⁵³とは、同じ社会現象としての文学を、プロセスと場とで、ちょうど縦と横とで切りあうよう対応関係を持つ。しかし、討論では、システム論の狙いと場の理論との類似性を丁寧にアピールするシュミットを、ブルデューは「似ているが全く違う」⁵⁴と撥ねのけてしまう。自分の関心は社会の実情調

⁵² テキスト問題の検討が不十分のまま終わった理由の一つがここにある。ルッシュは、システム概念そのものの再考が必要と捉え、「文学をシンボル（テキスト）システムと捉えるべきか、社会システムとして構想すべきか、という問い自体、有益なものではない」と批判（Rusch, G.: *Literatur in der Gesellschaft*, in: Schmidt (Hg.) 1993, S.170-193, 引用は S. 172）。シンボルシステムとの関係を検討することについてさえ、グループ内では意見が分かっていたのである。

⁵³ Bourdieu, P., 1993. *The Field of Cultural Production*. New York: Columbia University Press.

⁵⁴ Bourdieu, P., et. al.: *The structure of the literary field and the homogeneity of cultural choice*, in:

査にある。理論はそのためのものだ。それに対し、システム論は思弁的で経験性を重視せず、機能主義的で、非歴史的だ。こう拒むのである。ブルデューの応答は理論的というより価値論的で、生産的な討論になっていたとはいいがたい。⁵⁵ しかし、実際、属性を手がかりに作家相互のポジション関係を描き出すブルデューの理論がすでに様々な調査を触発していたのに対し、システム論の関心が原理論中心だったのも事実である。具体的事象よりもサイバネティックな原理。社会状況より社会性。歴史性や経験性より一般則。実際、こうした傾向は、少なくともルーマンに関しては、たびたび指摘され、ルーマン自身も、経験的研究の理論的軽視を公言してもいた。⁵⁶ ブルデューがシステム論を十分に理解していたとは言えないにしても、ブルデューの反応は十分に根拠のあるものだったのである。

このエピソードは、経験性を巡ってシステム論に理論体質上のある種の課題があることを示唆するとともに、シュミットらが当時どのような競合関係に曝されていたかも物語っている。当時、ゾーゲン派は、経験文学研究というもう一つ別の文脈の中に立っており、経験性は、彼らにとっての課題でもあったのである。彼らが危惧していた点は、ボーフム派、ライデン派に対して指摘したのと同じ、彼らのシステム論が、コミュニケーション論的で、抽象的次元に留まり、経験性に乏しいのではないか、という点である。問題はこうである。シュミットはテキストとの関係パターンから、文学行為をテキストの生産、受容、加工（批評・翻訳）、媒介（出版・放送）の四行為のタイプに分類した。しかし、媒介に関する実際の姿を見てみると、媒介行為というよりも、それは、流通やメディアや図書館など、広範な社会領域と接合する組織性・複合性を持った分野でしかない。加工に関しては批評活動の捉え方が問題で、文学論的な議論などでは、テキストとの加工関係は必ずしも明確でない。文学を主題化する領域と捉えた方が現実には即している。となると、この基本行為モデルでは、システムの現実を認識する力が弱いのではないか。⁵⁷ しかし、ここ

Ibsch, E., D. Schram and G. Steen (Ed.): *Empirical Studies of Literature: Proceedings of the Second IGEL-conference, Amsterdam 1989*. Amsterdam (Edition Rodopi) 1991, p 427-443.

⁵⁵ 一般にブルデューのシステム論に対する態度は冷淡で、言及自体も極めて少ない。ナセル／ノイマンも「決まりきったあざけりの言葉で反応しているのみ」と表現している（ナセル／ノイマン（森川剛光訳）「何のための理論比較か」、ナセル／ノイマン編『ブルデューとルーマン 理論比較の試み』新泉社、2006年、10頁）。その一方でルーマンとブルデューとは理論的に多くの共通点があることも社会学者の間では確認されている（上掲書参照）。

⁵⁶ 例えば、「システム理論にとって本当の対案は、経験的調査研究であろう。それはどちらかといえば、理論をもたずに、場当たりの仮説によって、研究を遂行するものといえよう」（ルーマン（土方透訳）「システム理論の最近の展開」、土方透編『ルーマン／来るべき知』勁草書房、1990年、27頁）。

⁵⁷ バルシュは、解決策として、メタレベルの導入を提案：Barsch, A.: *Handlungsebenen. Differenz-*

で問題となるのは、この行為分類が慣習（コード）によるシステムの境界画定問題と密接に結びついている点である。テキストを文学テキストとして扱うかどうかの一点でシステムに属するか否かが決まるとすると、文学論争や、出版・流通場面の幾つかの活動など、テキストに直結していないものはシステムの外に置かれることになる。これは、観念的な境界画定論に陥っているということではないのか。ここで最も議論を呼んだのが、ルッシュの批判である。⁵⁸ ルッシュは、慣習によって画定できる狭い意味での文学行為と、社会現象として文学を構成する複合的な因果関係とを区別しつつ、(1) 文学活動は実際には全体社会の中に分散し、全体社会と連動しつつ生起するもので、狭い意味での文学行為だけの文学システム像は幻想でしかない（ホリスティックな現象としての文学）、そして、(2) 文学システムの境界は自己組織的なプロセスの展開に依存するがゆえに流動的で、どういふ行為や役割や制度が文学システムに属するかは最終的には経験的な問題でしかない（開かれたオントロジーの必要性）、と指摘したのである。しかし、ここで注意しなければいけないのは、このルッシュのホリスティック論、開かれたオントロジー論は、事象像としては、ルーマンのシステム／環境論と全く変わらないという点である。もっとも、ルーマンでは、コミュニケーションと事象をいったん分け（システム／環境区分）、コミュニケーションによる意味付与を通して（例：文学批評家、文芸出版と認識化）、関連する社会的な事象となって立ち現れると捉えるのに対し、ズィーゲン派はあくまで行為や行為者といった経験的事象の側で考察する。こう捉えると、ズィーゲン派のシステム像の問題点も見えてくる。シュミットは、行為者が共参照しあう現実像を持ち合うことで行為の連結が生まれるというヘイルの構成主義的社会システム論に依拠して、ルーマン理論を修正した。ここまでは対案として成り立つが、その際、共参照の中身を、ルーマンが捉えるような幅広い社会的意味論では捉えず、テキストに対する慣習（コード）の一点に狭めてしまう。この点で、シュミットらの構想も、テキストを中心とした他の文学システム論と同じく、テキストにシステム論を直結させる罠に捕まっていたと言える。しかし、その後、シュミットは、ルッシュの開かれたオントロジーという指摘に答える形で、文学システム論をより現

ierung und Einheit des Literatursystems, in: Schmidt (Hg.) 1993, S. 144-169, Barsch, A.: Komponenten des Literatursystems: Zur Frage des Gegenstandsbereichs der Literaturwissenschaft, in: Fohrmann, u. Müller (Hg.) 1996, S. 134-158, Barsch 2000, 加工行為問題では、名執がグループの会議で問題提起をしている： Natori, M.: Das Sozialsystem Literatur und die Handlungsrolle 'Verarbeitung'. Skizze des Problems und einige theoretische Überlegungen, in: Barsch u. a. (Hg.) 1994, S. 123-141。

⁵⁸ Rusch, G.: Zur Systemtheorie und Phänomenologie von Literatur, in: *SPIEL* Jg. 10 (2) (1991), S. 301-339, Rusch, G.: Literatur in der Gesellschaft, in: Schmidt (Hg.) 1993, S.170-193, Rusch, G.: Phänomene, Systeme, Episteme, in: de Berg u. Prangel (Hg.) 1993, S. 228-244.

実的なものに修正してゆく。具体的には、(1) 行為者とその認知領域、(2) コミュニケーションプロセス、(3) 社会構造と制度(メディアシステムと関連)、(4) メディア提供物(文学テキストと広義の他の文学現象)、(5) シンボル秩序と文化的知識、といった複数の事象のレベルとそのレベル内の様々な構成要素の自己組織的な影響関係によって構成される、「混交生成のプロセスシステム(heterogenetisches Prozeßsystem)」として、文学システムを捉え直すというものである。核となるのは、創作、受容、加工、媒介の諸行為で、これは(1)のレベルで考えられているが、加工行為は(4)との関係から「広義の文学現象の加工」という表現に拡大され、テキスト媒介は、(3)の導入により、より具体化される。慣習は(5)の要素の中に位置づけられ、プロセスの結び目としての意義をシュミットは依然強調するが、慣習を直接システムの境界画定問題と結びつける観点は放棄される。境界画定はシステムの混交性ゆえに不明瞭で、経験的な問題でしかないと捉えるからである。また、これは、社会システム/シンボルシステム問題への回答として検討した、パラレルな認知、コミュニケーションプロセスの成立、シンボルシステムへのフィードバックという自己組織論の発展版でもある。⁵⁹しかし、これで現実路線に移ったとは言え、問題は別の形で残る。「経験性の下界に下りると、社会学的オートポイエシス理論の流線型の優雅さは著しく減退する」。⁶⁰シュミットはかつてこう述べたが、この言葉はシュミット自身のこの修正版にも当てはまる。境界画定論がドグマ的なものでなくなったとは言え、境界画定論に替わるシステム性観察の観点が用意されてはいないからである。サイバネティックな原理か、経験的事象の観察か。つまり、システム論が抱えていた二者択一図式から逃れることに成功したとは言えないのである。これは、実は、オートポイエシス論世代のシステム論の二分法論的立論構造に直接結びついた問題である。シュミットの場合も含め、オートポイエシス世代のシステム論は、プロセスの動態を、システム(作動的閉鎖性)と諸事象(オープンプロセス)に二分化し、前者の観点から、境界画定論的にプロセスを追う。そのため、自ずと経験的事象に当たる後者の方が、言わば非本質化されてしまうのである。経験的文学研究派は、ここから、文学システム論に関しては、むしろ一般システム論への回帰を説くようになる。これが論争を経た時点での、彼らの到達点であった。⁶¹

⁵⁹ Schmidt 1996, 特に, S. 113-120. Schmidt, S. J.: *Kalte Faszination*. Weilerswist (Velbrück) 2000 にもこのモデルは引き継がれている: S. 299 以降, 特に S.300-303.

⁶⁰ Schmidt 1993, S. 253.

⁶¹ Schmidt 1996, S. 113, Schmidt.2000, S.339.

5. ハイブリスティック

では、ここで視点を変え、現在の視点で、この問題を見つめ直して見よう。今や私たちは、人や情報や経済の動きが社会の輪郭を流動的なものにし、かつ、時に過剰にも見える集中化と周縁化の運動を示すことを知っている。こうした中、90年代末ごろから、複雑ネットワーク論や複雑系理論は、そこにある種の物理的振る舞いがあることを観察してきた。⁶² 集中化/周縁化の分布が、 $y = \alpha x^{-\beta}$ の数式で表される、ベキ則 (power law) ないしはそれに類する法則に従っていること、その背後に、富めるものがますます富む原理、マタイ効果、雪だるま効果とも言われる、アドヴァンテージの累積効果の原理、より一般的な物理学的表現としては、

確率乗算過程 (stochastic multiplicative

process) が存在していること、などである。現象としては、これは古くから指摘されていたものでもある。経済学でのパレートの法則 (Parato's law)、計量言語学でのジップの法則 (Zipf's law)、計量書誌学/計量情報学でのブラッドフォードの法則 (Bradford's law) やロトカの法則 (Lotka's law) 等。⁶³ それが近年、インターネット研究や物理経済学の発展により、まとまった知見として論じられるようになってきているのである。⁶⁴ ここでは、文学シ

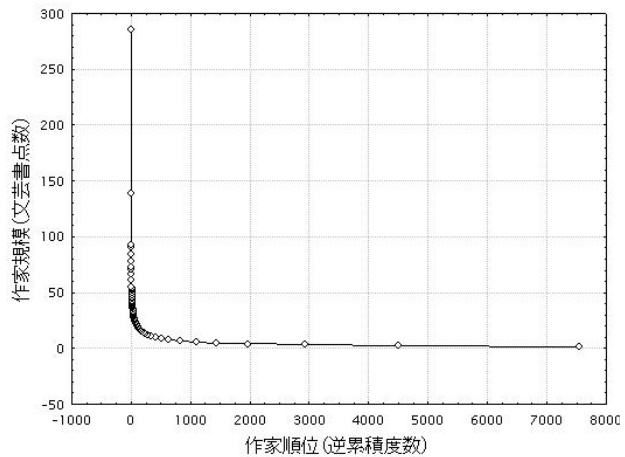


図1 作家ごとの刊行中の文芸書タイトル数(順位×規模)

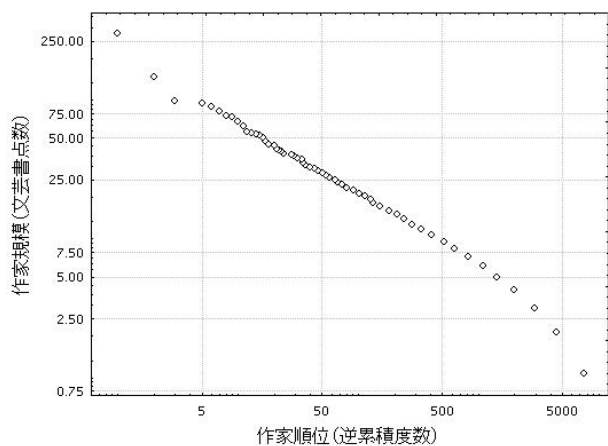


図2 xy 両軸を対数化すると、直線状に並ぶ(順位×規模)

⁶² 概観については、Mitzenmacher, M.: A brief history of generative models for power law and lognormal distributions, in: *Internet Mathematics*, vol. 1 (2) (2004), p. 226-251, Newman, M. E.: Power laws, Pareto distributions and Zipf's law, in: *Contemporary Physics*, vol. 46 (2005), p. 323-351 を参照。

⁶³ パレートの法則は富の集中、ジップの法則はテキスト中の語彙の集中、ブラッドフォードの法則は特定分野の研究の特定掲載雑誌への集中、ロトカの法則は特定分野の研究の特定著者への集中について、ベキ則が成り立つことを言う。

⁶⁴ 例えば、A-L・バラバシ (青木薫訳) 『新ネットワーク思考—世界のしくみを読み解く—』NHK出版、2002年、林幸雄 (編) 『ネットワーク科学の道具箱』近代科学社、2007年、青山秀明ほか『パレート・ファームズ—企業の興亡とつながりの科学—』日本経済新聞社、2007年。

システムに該当する例として、実際にドイツの出版目録を用いて調べた、現代作家の文芸書タイトル数の集中度の調査例を示しておく（図1，図2）。⁶⁵ この分布は、コミュニケーションの自己組織化が乗算的な原則の下で起こっていることを含意している。つまり、個々のコミュニケーション（作家ごとのシーン形成）は、事前のコミュニケーションの規模（浸透度，活性度）が大きければ大きいほど、次の段階のコミュニケーション規模の成長差が大きくなるように変化する（確率乗算過程）。人気が人気を呼ぶ、という経験則を思い起こしてもいい。つまり、システムの再帰的な振る舞いが、コミュニケーションの秩序形成を促しているのである。物理的な規模（読者数で考えてみてもよい）が、社会的リアクションの大きさを左右し、それがまた、人々の社会像（情報）に反映される。これがコミュニケーションの回路（作家選択）を強化する。数理的には、その際の乗算構造が生み出す指数的な変化に、何らかの加算ノイズ、または、シーン参入からの成長時間のばらつきなどの条件が加わると、容易にベキ則が導き出されることが証明されている。⁶⁶

これは、コミュニケーションプロセス全体が、文化的評価を乗算的に合成するある種の加工装置になっていることを示すと同時に、作品が表現であるだけでなく、価値付与された文化物とならざるを得ない点、そのため、個人（作家も読者も）がいかにか社会（の中の作品像）に対して、アシンメトリックな立場で向き合わざるを得ないかという点を示唆している。これらは、一見、オートポイエシス的なコミュニケーションの自己運動を例証しているようにも見える。しかし、環境とシステムを二分化し、前者の意味論で後者を見るという立論では、こうした乗算性をともなう自己組織性は死角に置き去られてしまう。自己組織性が成立するフィジカルな側面（コミュニケーション規模）と意味論的側面（作家についての社会的認知）との相互関係を、二分法論的に分断してしまうからである。そもそも、コミュニケーションに規模（浸透度，活性度）の差があり、したがって、様々な範囲の様々な強さの社会性が混在する点さえも（有名作家でさえ全ての人々が知っている訳ではない点に注意）、オートポイエシス論の立論の中には上手く収まらない。このため、オートポイエシス論のプロセス観は複雑系としての社会の振る舞いに比べ、極めてフラット

⁶⁵ 詳しくは；名執基樹「作家の秩序／秩序としての作家—ベキ則，複雑系，ジレンマー」、『日本独文学会北陸支部ドイツ語文化圏研究』第6号，2008年，44-65頁。

⁶⁶ 加算ノイズによるベキ則発生については：高安秀樹「複雑系のフラクタルゆらぎ」，ゆらぎ現象研究会編『ゆらぎの科学8』森北出版，1998年，1-38頁，成長時間のばらつき（ランダム・キリング）によるベキ則発生については：Reed, W. J. and B. D. Hughes: From Gene Families and Genera to Incomes and Internet File Sizes: Why Power-Laws Are So Common in Nature, in: *Phys. Rev.*, E66, 067103. (PDF). ベキ則発生の数理には他のものもある。次の文献も参照。林（編）2007年。

な印象を与える。これは、二重の偶有性理論をルーマンが社会性形成の原理と捉えている点とも関係している。非歴史的な、シンメトリックな一対一（！）の他我による揺らぎの相互調整が秩序形成の原理として持ち出され、多くの他者（世間）がすでに従っているものに個人が向き合わなければならないという、進化過程に根ざした、確率乗算的な秩序原理に主導権が与えられていないからである。

二分法的立論によって、実際に、どういう動態が死角に追いやられるか、もう一步踏み込んでみよう。これは、文学システム論争の中で、シュミットらが、ルーマンとは逆に、行為者による関係形成を重視し、共参照によるプロセス形成をシステム論の基盤としようとした点と関係している。つまり、ルーマンはシステムの構成単位をコミュニケーションとし、これを、社会性を具現する分解不可能な最小単位と捉えた。その際、行為者や行為は、二分法論的に、システム側から切り離され、環境側の諸事象として扱われることになる。ところが、実際には、コミュニケーションがコミュニケーションとして成り立つためには、行為者による関係選択の次元の仲介がなければならない。話し相手を選ぶ、作品を選ぶ、といった次元のことである。⁶⁷ ここで、複雑性の処理問題が起こる。無数にあるテキストの選択可能性の中から、何か一つが選択されなければならない、という問題である（複雑性の側面）。そのため、それを処理する構造が、行為者の判断装置が必要になる。つまり、選ぶべき作家についての事前知識、どういう名前の作家がどう面白いかなどの文学像が必要となるのである（秩序の側面）。しかし、その知識は、先行するコミュニケーションの結果（読書体験、評判）によって生み出されるものでしかない。つまり、文学像を通して、事前のコミュニケーションの規模が次の段階のコミュニケーションの規模に影響を与える、再帰的なプロセスが形成されているのである（自己組織性の側面）。そもそも、むき出しのテキストが、単独でコミュニケーションの中心に置かれるというイメージは間違いである。むきだしのテキストではなく、作家名や作品名という固有名のインデックスを

⁶⁷ 作品や論文の選択は、ルーマンでは、芸術や学問システムでの進化過程を論じる際に取り上げられている。また、経験性も、進化過程論の枠組みの中で位置づけられ得ると示唆されている（Luhmann, N. 1998, S. 439）。しかし、ルーマン理論では、進化過程はオートポイエシスのプロセス内で捉えられ、コミュニケーション概念の組み換えが全く行われないうまま、抽象的に進化過程論が追加導入されるに留まる。「オートポイエシス論は、これまでの進化学論の思考方法とは、明確な食い違いを起こす。作動的に閉じた社会システムは、オートポイエシスを行うか、行わないかでしかない。そうした閉じた社会システムが、始まりや終わりをつくり、いかにして進化を起こすことなのか？どう、次第に発生してゆくのか？しかし、移行状態の“半分の”生命、“少しばかりの”コミュニケーションなど、存在しはしない。生物は生きるか生きていないかしかない。コミュニケーションはそこに在るか無いかしかない。コミュニケーション概念はこうした妥協無き厳格さを求めるのだ」（Luhmann, N. 1998, S. 440）。

備えた、社会的に主題化可能な作品という形態を通して、情報化され、選ばれ、読まれ、文学プロセスは営まれる。個人の創作物としての知や表現は、固有名の浸透を通して社会的に共有化される。そういう、認知体験の社会的共有化を可能にする操作基盤として、固有名が定着しているのである（固有名という体制）。こうして、固有名を含む認知上の文学像と社会上のコミュニケーションプロセスは相互に再帰的なフィードバック関係に置かれることになる（参照点としての文学像）。そこで選ばれ、実現されるコミュニケーションの物理的規模が大きければ大きいほど（多くの読者が選ばば選ぶほど）、そこから生み出される情報としての文学像（特定の作家についての評判など）は強化され（フィジカルな面から情報面へ）、そして、文学像が強化されていけばいくほど、その作家のコミュニケーション回路はますます多くの人々に支えられるようになる（情報面からフィジカルな面へ）。確率乗算的な、集中化／周縁化の秩序形成のメカニズムはここで生まれる。これについての理論的枠組みとしては、ルーマン理論の意味次元を個人の認知内に置き直し、システムの自己組織性は社会的プロセスと認知内の社会像の相互規定関係によって生み出されると捉えた、ヘイル／シュミットの構想を基本的には踏襲できる。⁶⁸ ただし、その際、自己組織化を単に意味論的な側面で捉えてしまうと、システムの自己組織性を捉え損なってしまう。共参照は実質的には、事象の規模と乗算性というフィジカルな側面を伴った多重参照となって起こるからである（多重参照性）。つまり、システムの自己組織性とは、プロセスのフィジカルな側面が関係しあうことによって起こる、事象面を巻き込んだ、ハイブリッドな現象なのである。二分法論的に振舞うオートポイエシス論は、このハイブリッド性の体現に問題を抱えてしまうのである。

ハイブリッド。私たちはともすると、社会や文化を、私たち自身の手による、自然とは違う人間の固有物だと捉えてしまう。ラトゥールはこれを近代という人間中心主義的な時代が生んだ虚構とみなし、ハイブリッドとしての現実を直視するよう説いた。⁶⁹ 例えば、シーソー遊びをする子供は、自分達の遊びの意味論しか持たないかもしれない。しかし、その遊びは、彼らの身体を介した物理的関係性の上で成り立っている。これと同じで、社会システムも、人々によって織り成される活動としてのリアルな物理性を持っているのである。これと似たことは、テキストを巡る問題にも当てはまる。ルーマン派では、オート

⁶⁸ Hejl, P.: *Durkheim und das Thema der Selbstorganisation. LUMIS-Schriften 18.* Siegen (LUMIS) 1988, S. 24-31, Schmidt 1995, S. 237.

⁶⁹ B・ラトゥール（川村久美子訳）『虚構の「近代」』新評論，2008年。

ポイエシス論に結び付けられることで、テキストは事象面から切り離され、抽象化される。その結果、テキスト論は規模と強度を持ったフィジカルなコンテキスト（読者層、文学シーン）を奪われ、方法論的・対象論的な曖昧さを抱え込むか、ライデン派のようにコンテキスト像の着地点に苦慮することになる。一方、経験的文学研究派は、資料としてテキストを扱うこと自体に問題を持つ。これに関して、後に、論争を外部から観察していたヤーラオスは、コミュニケーションと意識の構造的カップリングの接点として意味を見るルーマンの論点を、グンブレヒトに習って解釈問題に結びつけ、そこに二つのシステムの交差構造の不完全さが引き起こすジレンマを指摘する。そして、記号論的な側（コミュニケーション）からも、受容論的な側（意識）からも完全な根拠づけが難しい、「解釈の背後遡及不能性」を認めるよう説く。⁷⁰ 経験的文学研究では、アメリカのボルトルッシとディクソンが、実際に、これと似た性質の方法論的決断を行っている。⁷¹ 彼らはゾーゲン派が取った、テキスト自身には意味はないという、対象論的には正確ではあるが、方法論的には遠い回り道となる無理のある観点を避け、言語面だけでなく、物語の設定やプロットといった内容的なものも含め、科学的に合意可能という意味での客観性が確認できる範囲であれば、始めからそれをテキスト特徴（feature）と捉え、読書心理学の実験基盤とする立場を取る。これは、テキストの表現素材面には、身体的感覚や日常知や時代体験といった、認知過程上の異なった地点に顔を出す、多種多様な要素が投入され得ることを、実質的に計算に入れた方法論的判断である。ヤーラオスのカップリング上のジレンマというテーゼは、シュミットの構成主義的理論の枠に置き換えると、認知のパラレル化の曖昧さ（つまりコミュニケーション的共有化の不完全性）という問題に該当する。この枠組みで想像を膨らませて考えてみるならば、身体的感覚や日常知や時代体験など、必ずしも社会的と言えない要素がいかに多く文学表現に紛れ込むか、より鮮明になる。言わば、生きたテクス

⁷⁰ コミュニケーションが基本単位となるルーマンの理論では解釈（コミュニケーション不全が前提）は理論対象にはならない、とグンブレヒトは先ず指摘する。その上で、解釈が必要な事態があるとすると、それは、コミュニケーションシステムと意識システムとの構造的カップリングが不完全で、接点役の意味という存在が不鮮明な場合だと論じる（Gumbrecht, H. U.: *Interpretation versus Verstehen von Systemen*, in: de Berg u. Prangel (Hg.) 1995, S. 171-186）。これを受けて、ヤーラオスは、テキストの意味は、意識の側で根拠づけるとコミュニケーション（社会）の側を軽んじ、コミュニケーション側を主張すると意識の根拠づけを無視する、解釈の背後遡及不能性を持つ、と論じる（Jahraus, O.: *Die Unhintergebarkeit der Interpretation im Rahmen literaturwissenschaftlicher Theoriebildung*, in: Jahraus, O. u. B. Scheffer (Hg.): *Interpretation, Beobachtung, Kommunikation. IASL. 9.Sonderheft*. Tübingen (Niemeyer) 1999, S.241-291）。

⁷¹ Bortolussi, M. and Dixon, P.: *Psychonarratology: Foundations for the Empirical Study of Literary Response*. New York (Cambridge) 2003.

トとは、認知のパラレル化が可能と思われるあらゆる素材を使いつつ、新たな認知や感情の誘発を誘う、複合的な仕掛けなのである。したがって、それを社会理論で特定化しようとするとう無理が出る。しかし、だからといって、それを個人的なものと言い切ることもできはしない。反感の共有化も含めた、広い意味での共感の可能性を模索しあう地点に、生きたテキストの命があるからである。社会性未満、個人性以上。テキストもハイブリッドなのである。認知の中の共有化され得る側面を方法論的な自覚のもとに課題関連的に拾い出す、ボルトルッシらが提案するテキスト特徴論的なアプローチは、この点で、資料としてテキストを位置づける上での現実的な解決策と言える。また、それは、強引な解釈法に走ることなく、素材や表現史、作家研究などでテキスト資料に厳格に接する場合の、自覚的研究者の研究方法とも、そう変わらない。こう言うことができる。生きたテキストは学問的には飼い慣らせない。資料化し得るテキストの相をつなぎ合わせて、その痕跡を示すしかない。この観点から言うならば、本物の捕獲を夢見たライデン派は立ち往生したが、ボーフム派はマクロな限られた相で痕跡を追うことで実践例を示し得たと言える。恋愛と小説との共進化を扱ったヴェルバーの『小説としての恋愛』(03年)や、芸術家を多元コンテクスト的に見るカンプマンの『芸術家であること』(06年)と、その後の展開も続いている。⁷² 一方、ゾーゲンの経験的文学研究派は、自由に生きると、テキストに学問的解釈の鎖をつけることを拒む立場である。ただし、グループがそれぞれ今も昔のような形で残っているという訳ではない。文芸社会史派はプロジェクト期間が終わると、いち早く個別研究に戻っていった。また、シュミット、プルンペ、ヴェルバー、デ・ベルクなど多くの研究者たちが、転出や退官で、すでにそれぞれの大学を去っている。

6. アンドロイドと電気羊

ドイツでは、ルーマンの存在があまりに大きかったためか、システム論とオートポイエシス論を同一視する傾向が極めて強く、その後の研究例もルーマンに依拠するものが多い。こうしたオートポイエシス論の過度な一般化と、90年以降の文学研究のメディア研究化から来る社会理論としての意義の相対化により、論争以降の文学システム論の展開を眺めてみた時、理論面での停滞感は否めない。かつてのゾーゲンの研究者たちからは、文学システム論の経験科学的展開力を検討するより、いち早くメディア研究に研究対象を広げる

⁷² Werber, N.: *Liebe als Roman. Zur Koevolution intimer und literarischer Kommunikation*. München (Fink), 2003, Kampmann, S.: *Künstler zu sein*. München (Fink) 2006.

ことで、そこから経験科学的な展開力を得ようとした様子も伺える（曰く、「テキストから文学システムを経てメディアシステムへ」（フィーホフ））。⁷³

この論文では、こうした現在のドイツの理論状況とは別の、近年の他の複雑理論や物理経済学などのシステム研究に、かつての論争を克服する鍵があると考えている。つまり、先の章で示唆したような、フィジカルな相を含む、ナチュラル・システムとして文学システムを捉える観点である。（1）数量的に追跡できる事象面での自己組織性を観察しつつ、（2）学際的に、複雑理論を始め、生態系研究や進化過程論など、関連分野の基礎的知見の利用を検討し、（3）シーン構成や時系列的変化の分析などにそれを生かし、（4）作家やその作品など、テキストの特徴面を資料化しつつ、調査を拓げてゆく、そういった経験科学的な展開力が期待できるからである。しかし、その一方で、ドイツでの多様な文学システム論の展開や、いまだ現れ続けるルーマンの影響を見ると、システム理論がドイツの文学研究の社会的な視野拡大に著しく貢献していることも確かである。ホファーの『文学のエコロジー』（07年）やフック／ツォルン編の『社会のポピュラー』（07年）など、検討範囲も広く、ラインファントの文化論やヤーラオスのメディア論など、より広い文化・メディア研究の理論的土壌の一つにもなっている。⁷⁴

論争のまとめは、ちょっと変わった譬えで表現したい。この論文のタイトル「オートポイエシス論は文学テキストの夢を見るか？」は、フィリップ・K・ディックの小説『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』⁷⁵をもじったもので、オートポイエシス論は、フィジカルな自然との連続性を断たれた、サイバネティックな原理で動くアンドロイドに、⁷⁶ 文

⁷³ Viehoff, R.: Von der Literaturwissenschaft zur Medienwissenschaft. Oder: vom Text- über das Literatursystem zum Mediensystem, in: Rusch, G. (Hg.): *Einführung in die Medienwissenschaft*. Wiesbaden (Westdeutscher Vlg.) 2002, S. 10-35. ルッシュはメディア研究の中でシステムの動態をモデル化する方向に向かう: Rusch, G.: *Medienwissenschaftliche Systemanalyse*, in: Rusch (Hg.) 2002, S. 294-311. シュミットは、ミュンスター大に移り、メディア（文化）研究の中に経験的文学研究を位置づけた後（Schmidt 2000），“物語／ディスクール論”の展開など（Schmidt, S. J.: *Geschichten und Diskurse. Abschied vom Konstruktivismus*. Reinbeck bei Hamburg (Rowohlt) 2003）, 思想色の強い執筆活動を行っている。

⁷⁴ Hoffer, S.: *Die Ökologie der Literatur*. Bielefeld (transcript) 2007, Huck, Ch. u. C. Zorn (Hg.): *Das Populäre der Gesellschaft*. Wiesbaden (VS Verlag) 2007, Reinfandt, Ch. 2001, Jahraus, O.: *Literatur als Medium*. Weilerswist (Velbrück) 2003.

⁷⁵ フィリップ・K・ディック（浅倉久志訳）『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』早川書房、1977年。

⁷⁶ ここで念頭に置いているのは、ルーマンの機能主義版オートポイエシス論である。一方、生命現象もベキ則を伴う動的秩序化の仕組みを持つことが、バラバシらの代謝や蛋白質合成の複雑ネットワーク分析から明らかになっている（バラバシ 2002年）。ナチュラル・システムとしての複雑系と認識システムとしてのオートポイエシスシステムとのシステム像の落差は、単に

学テクストという理論的構成物は、飼うことのできない生きたテクストの代わりと言う点で、擬似生物、電気羊に対応する。『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』の舞台は、もはや入手困難となった本物の生物の代わりに人々が擬似生物を飼う未来社会である。主人公は本物の生物を手に入れるため、賞金がかけられたアンドロイドを追う。しかし、その闘いは何も残さない。主人公は、人間そのもののように振舞うアンドロイドに感情移入し、翻弄され、傷つき疲れ果てて、妻の待つ家に帰る。ルーマンのオートポイエシス論は、この物語に登場するアンドロイドに似ている。擬人的で、多くの研究者が共鳴してしまうほど、理論的魅力に満ちている。しかし、直接そのオントロジーを受け入れることは危険である。接するためには、方法論的に捉え直し、反省化可能なものとしておく必要がある。小説は、本物の生物を断念した主人公とその妻が、新たな擬似生物を機に心を通わせ始める場面で終わる。暗い結末だが、小説の中では、新たな出発とも受け取れる。ヤーラオスは生きたテクストの意味世界の遡及不可能性を指摘した。文学テクスト概念の仮構性の自覚もまた、文学システム論争から引き出せる重要な教訓の一つである。

理論の射程の問題だけでなく、自然と情報との非対称の関係性を反映しているように思われる。

Träumt die Autopoiesistheorie vom literarischen Text?

— Kritische Bemerkungen zur deutschen Literatursystemdebatte —

Motoki Natori

Die Autopoiesistheorie, die N. Luhmann ausgehend von der Theorie des chilenischen Biologen Humberto Maturana als eine Gesellschaftstheorie entwickelt hat, ist heute ohne Zweifel eine der erfolgreichsten Sozialtheorien in Deutschland. Aber trotz der breiten theoretischen Resonanz ist die praktische Anwendbarkeit dieser Theorie immer noch umstritten. Anfang der 90er Jahre gab es auch in der Literaturwissenschaft über diese Theorie eine heftige Debatte. Im Zentrum der Diskussion stand die Kontroverse um die kommunikationszentralistische Grundannahme der Autopoiesistheorie, die die Kommunikation als einziges basales Element der Gesellschaft behandelt. Sie beobachtet von diesem Standpunkt aus, wie die Verkettung von Kommunikationen ein einheitliches soziales Phänomen wie Wirtschaft, Kunst, Wissenschaft usw. erzeugt. Während in diesem Theoriekonzept der semantische Aspekt der Kommunikation als eine Grundmechanik der Systemgestaltung betont wird, verlieren die Menschen (Aktanten) den Status eines Systemelements. Sie werden als Umweltfaktor eingestuft. Dieses Systemkonzept von Luhmann lieferte einerseits denjenigen Literaturwissenschaftlern, die sich für die semantische Grundstruktur der literarischen Kommunikation interessieren (Bochumer Gruppe um G. Plumpe und N. Werber mit ihrer „polykontextuellen Literaturwissenschaft“), eine neue Theoriebasis, aber auch denjenigen, die von einer Gemeinsamkeit zwischen Luhmanns Theorie und dem Dekonstruktivismus ausgehend eine sozialwissenschaftliche Umfundierung der dekonstruktivistischen Texttheorie vorschlagen (Leidener Gruppe um M. Prangel und H. de Berg mit ihrer „Text/Kontext-Differenz“-Theorie). Aber dies rief gerade bei denjenigen Literaturwissenschaftlern heftige Kritik hervor, die sich schon seit den 80er Jahren mit der soziologischen Perspektivenerweiterung beschäftigt und sich dabei auch mit einer eigenen systemtheoretischen Orientierung auseinandergesetzt hatten. Vor allem die Münchner Gruppe der Sozialgeschichte der Literatur (G. Jäger, J. Schönert. C.-M. Ort u. a.) und die Siegener Gruppe der Empirischen Literaturwissenschaft (S. J. Schmidt, G. Rusch u. a.) sahen in der Luhmann-Rezeption die Gefahr einer Rückkehr zur textimmanenten Literaturtheorie und schlugen andere Theorieorientierungen vor, wie eine Anwendung der strukturell-funktionalistischen

Systemanalyse von T. Persons (Münchener Gruppe) oder einer (radikal-)konstruktivistischen Sozialtheorie, die statt vom Kommunikationsbegriff vom Aktanten- und Handlungs begriff ausgeht (Siegener Gruppe). Mitte der 90er Jahre wurde aber klar, dass wegen der Unversöhnlichkeit der Grundpositionen im Text- und Literaturwissenschaftskonzept diese Theoriedebatte in eine Sackgasse geraten muss. Diese Debatte machte andererseits die Münchener und die Siegener Gruppe gegenüber dem Konzept „Literatursystem“ so kritisch, dass dieses Konzept, das von der Siegener Gruppe erst in den 80er Jahren in die Literaturwissenschaft eingeführt und auch von der Münchener Gruppe unterstützt wurde, oft in Frage gestellt wurde. Im Hintergrund stand eine internationale Diskussionslage innerhalb der Empirischen Literaturwissenschaft, wo die Systemtheorie im Vergleich mit anderen Ansätzen (z.B. Feldtheorie des P. Bourdieu) unter dem empirischen Gesichtspunkt als wenig produktiv angesehen wurde.

Wenn man nun die Diskussion in den 90er Jahren mit der neuesten internationalen Entwicklung der Systemtheorie vergleicht, wird deutlich, wie die damalige Diskussion physische Aspekte des Systems außer acht gelassen hat. Die „complex network“- und „complex (adaptive) system“-Theorie werfen heute auf die Physikalität der sozialen Prozesse neues Licht. Danach bildet der selbstorganisierende Prozess des Systems einen stochastischen multiplikativen Prozess in der Form von „Umfang₍₂₎ = F(t) · Umfang₍₁₎“, der oft zur einer potenzgesetzlichen Verteilung des sozialen Phänomens (Einkommen, Knotengröße des Netzwerks, Stadtgröße, Anzahl der wissenschaftlichen Beiträge usw.) führt, die der Formel „Umfang = a · Rangordnung^{-b}“ folgt.

Dieser Aufsatz argumentiert mit dem Resultat der empirischen Studie, die statistisch die Verteilung von belletristischen Titeln und deren Wandlung analysiert hat, dass diese physische Mechanik auch beim literarischen Phänomen zu bestätigen ist, und schlägt ein neues Theoriemodell vor, dass (1) der Umfang der literarischen Kommunikation, z.B. Rezeption eines Autors, die Verbreitung der Information über den Autor beeinflusst (soziale Dimension der literarischen Kommunikation => literarische Information), (2) diese Information wiederum die weitere Kommunikation bedingt, indem die Information die Selektion des Autors steuert (literarische Information => soziale Dimension der Kommunikation), und (3) diese reflexive, multiplikative Wechselbeziehung zwischen Aktantendimension (Informationsbildung) und Sozialdimension (Kommunikationsbildung) eine Grundmechanik des Systems konstruiert, die man als *multireferenziell* bezeichnen kann. Indem diese Analyse zeigt, dass vor der Kommunikation ein

noch tieferer Prozess der sozialen Selektion existiert, und dieser die Gestaltung der Kommunikation bedingt, macht sie deutlich, wo die Grenze des kommunikationstheoretischen Systemkonzepts von Luhmann liegt. Im literarischen Phänomen verbergen sich zwei Aspekte – es ist ein Ensemble der kommunikativen Handlungen des Menschen, und zugleich ein Produkt eines sozialen Selektionsprozess mit eigener physischer Dynamik. Das Literatursystem muss in diesem Sinne als ein „natürliches“ komplexes System untersucht werden.